

土城としての御土居

——土築構造と立地についての基礎的予察——

門 田 誠 一

〔抄 録〕

豊臣秀吉が京都の周囲に築いた土塁である御土居については、これまで全体の平面的プランや位置などについて、いわば巨視的な検討が主体を占めてきた。これに対し、本稿では佛教大学8号館地点における御土居跡の土層断面の観察によって、御土居の立地を復元し、これにともなう土塁の構造要件を検討した。その結果、この地点では御土居が高位段丘端部に位置すると考えられ、また、その立地から東アジアの城郭用語でいうところの夾築構造の土塁であったことが検証された。また、御土居の他の地点における土塁盛土の調査を勘案すると、版築工法ではなく、土手状の小盛土を利用したものと類推された。このような御土居の立地構造の微視的な分析から、とくに東北部分の御土居は段丘の比高差を活用して実際以上の偉容を示すという点で、すぐれて政治的な意味合いをもつことを指摘した。

キーワード：御土居、夾築、立地、盛土方法、土城、土塁

はじめに

人は土を盛り、石を積んで己を守り、また支配者は己の勢力範囲を画することによってその力を保とうとした。壁を築いて土地や人を囲い込み、その生命や生活、さらにはそれを基本とする政治権力を保とうとすることは、歴史のなかでは一般的な行為である。

しかしながら、中国にさまざまな事象の範をとってきた日本列島において、丘陵や山岳に営まれた軍事を主な目的とした城壁ではなく、都城を圍繞する壁は、古代よりその例をみず、これをなしたのは実に豊臣秀吉によって天正19年(1591)によって築かれた御土居を待たねばならなかったことは日本史の一般的な説明として広く流布している。

御土居は日本史のなかに、いわば忽然とあらわれた、それまでとは異質な構築物であり制度のように受けとめられるが、これについて京都の都市としての変化のなかでの吟味も進められ

(1) ている。また、御土居そのものについての実証的検討とそれによる位置づけとしては、近年の中村武生氏による一連の論考がある。(2)

小稿では、御土居について、実際の観察成果をもとにしながら、城壁の立地や構造について、筆者が年来すすめている東アジアの山城や城郭などの実地検討の結果から、気づいた点について若干の考察をしてみたい。

1 御土居の考古学的研究の現状——既往の考古学調査——

御土居の研究史については近年では丸川義弘氏による丹念なまとめがあり、詳細はそれによるべきであり、ここでは土塁の構造の面に限って考古学的に判明している成果について瞥見しておきたい。(3)

まず、御土居の盛土そのものが断面観察によって、構造的あるいは土木技術的に判明している調査例はわずかであるが、それらのなかから、本稿の記述に関連するものを中心に概述しておこう。

発掘調査によって確実に御土居の盛土が断面観察されているのは平安京の条坊でいうところの右京七条一坊の地点（京都市下京区朱雀堂ノ口町、現在の中央卸売市場内）である。この地点は土塁と堀とが一体で確認された稀有な例であって、ここでの土塁の幅は20mで、高さは約2mであった。土塁の南側で検出された堀もほぼ同じ規模で、幅20m、深さは約2mであった。この地点では断面観察から御土居の盛土の方法も観察されている。それによると、まず土塁の内側の端部に当たる堀から遠い地点に小山を築いて、これを覆うようなかたちで外側（堀側）に土を投入しながら盛土しているとする見解が示されている。(4)(5)（図1）

筆者も、同様の工法をとっている山科本願寺跡の土塁の断面観察によって、おそらくは断面三角形を呈する土手状の小盛土を築いて、この上から土を土塁の中央部に落とし込んでいくという盛土法をとったものと推測している。(6)ただし、堀の掘削土を盛土に使用する場合、堀に近い土塁線端部から盛土をはじめるのが労力の面からも妥当であると思われる。この場合、理論

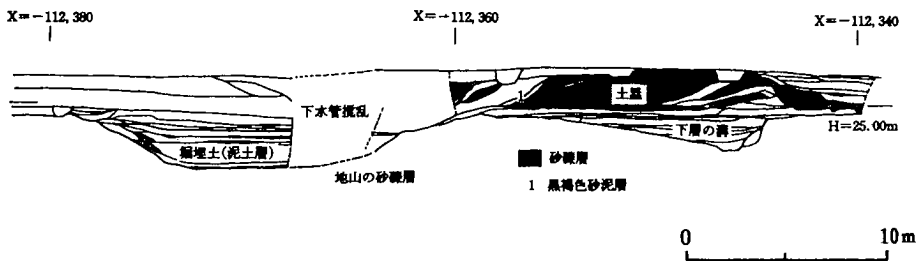


図1 発掘調査で確認された御土居の盛土と堀の断面図（中央市場内地点）

上では盛土の基本となるべき断面三角形の小山は堀に近い側に築かれるのが必然的であるのに、右京七条一坊地点の御土居の場合は堀より遠い側から盛り上げが進行したと考えられる⁽⁷⁾。この点は我々の工法上からの解釈をこえているところであるが、実際の観察結果は如上のとおりであって、今後に残す課題は多いが、ここでは本稿の以下での考察に資する点として、山科本願寺と御土居の盛土工法の基本的作業要素の類似にまずは注目しておくこととしたい。

2 御土居の立地構造 —— 西北部地点の観察 ——

北野天満宮（京都市上京区）の社地内にある御土居は残存状態のよいことで知られるが、その西側には紙屋川という河川が流れている。北野神社の西側での現在の紙屋川の川幅は最大でも7～8m程度に過ぎないが、中村武生氏の聞き取り調査によると、これより南の一条通りのあたりでは昭和の初年頃には大きな洪水があったという⁽⁸⁾。

北野天満宮以北でも佛教大学西側地点あたりの御土居と通常水位の紙屋川の川面とは地図上の標高によって算出すると比高にして14m以上の差があり、近代以降の改修を考慮に入れても、現今の状況では紙屋川がこの部分で御土居をこえる水位の洪水を起こすとは考えにくい。

いずれにしろ、御土居の西側なかでも北野天満宮以北の部分は、このような紙屋川を含む自然地形との関連から、その性格について論ずることができる箇所ではないかと考えられる。

1995年に入って、佛教大学の新しい研究室棟を建設するに際して、紙屋川にそった御土居の通過地点を含む部分を対象として造成工事を行うことになった。(図2～4) この部分は近年の推定復元によっても、とくに東側部分は御土居の土塁線が走っていたと部分に相当することは間違いないとみられている⁽⁹⁾。しかしながら、現況では全体として西側の紙屋川に向う傾斜地であるが、地表面でも土塁の痕跡は残存しておらず、御土居の削平された、端的には御土居跡地とされる部分であり、盛土構造の分析は期待されなかったが、主として自然地形に対する御土居の立地状況をさぐるためのいとぐちとなることを期待しつつ、工事に先立つわずかな猶予を利用して、1995年4月25日より5月18日の間に学生多数の協力を得て、授業の合間などを利用して、部分的に試掘溝を設定して下層の状況を把握することにした。造成地区の宅地址との関係から、掘削しやすくかつ近・現代の建物などで攪乱された可能性の低い部分について試掘溝を設定した。当初は造成地域の北辺と南辺の二つの試掘溝を設定しようとしたが、工事日程と土層の攪乱状態との兼ね合いから、北側試掘溝の掘削を断念し、南側の試掘溝のみで下層の状況を観察することとした。トレンチは幅1mで長さは29mにたった。(図4, 5)

地表観察からは御土居の土塁そのものは確認されず、御土居跡地とされていた所以でもあった。地山と認識した土層の上部に堆積した土層のなかで現代の攪乱土層以外に出土遺物によって年代の推定できる層(図6の1の⑥)からは寛永通宝と染付碗が出土している。この寛永

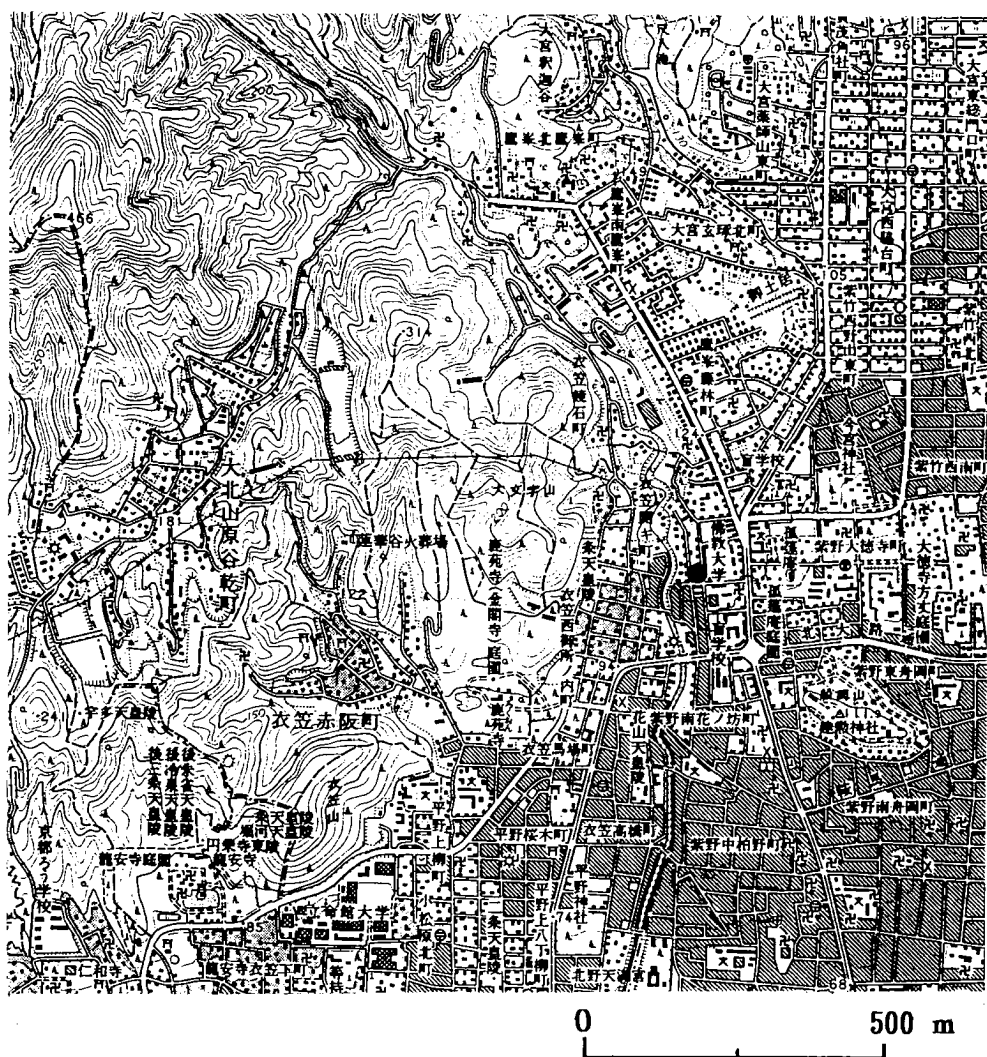


図2 調査地点の位置（黒いドットの地点）

通宝は「寛」の字の12画と13画が同じような位置から書き出され、「賈」の字の18画と19画とが離れているという字形から、いわゆる「新寛永」といわれるものの範疇に入り、その製造年代は寛文8年（1668）以降となる⁽¹⁰⁾。（図6の4）また染付碗のうち1点は江戸時代後期、18世紀代に流行の中心をもつと考えられる、いわゆる「くらわんか手」といわれるものであって、とくに18世紀でも後半に中心をもつとされる⁽¹¹⁾。（図6の2）もう1点は人工的に合成された呉須による型刷りの染付であって、ふつう明治時代以降とされるものである。（図6の3）よって、これらの遺物を含む層位の上限年代はもっとも時期の下る染付碗の時期によって、近代以降としなければならない。断面図をみても、この土層のみが後世の土坑や掘り込みあるいは大幅な攪乱を受けているとは断じられないので、当該部分には御土居を構成していた土層

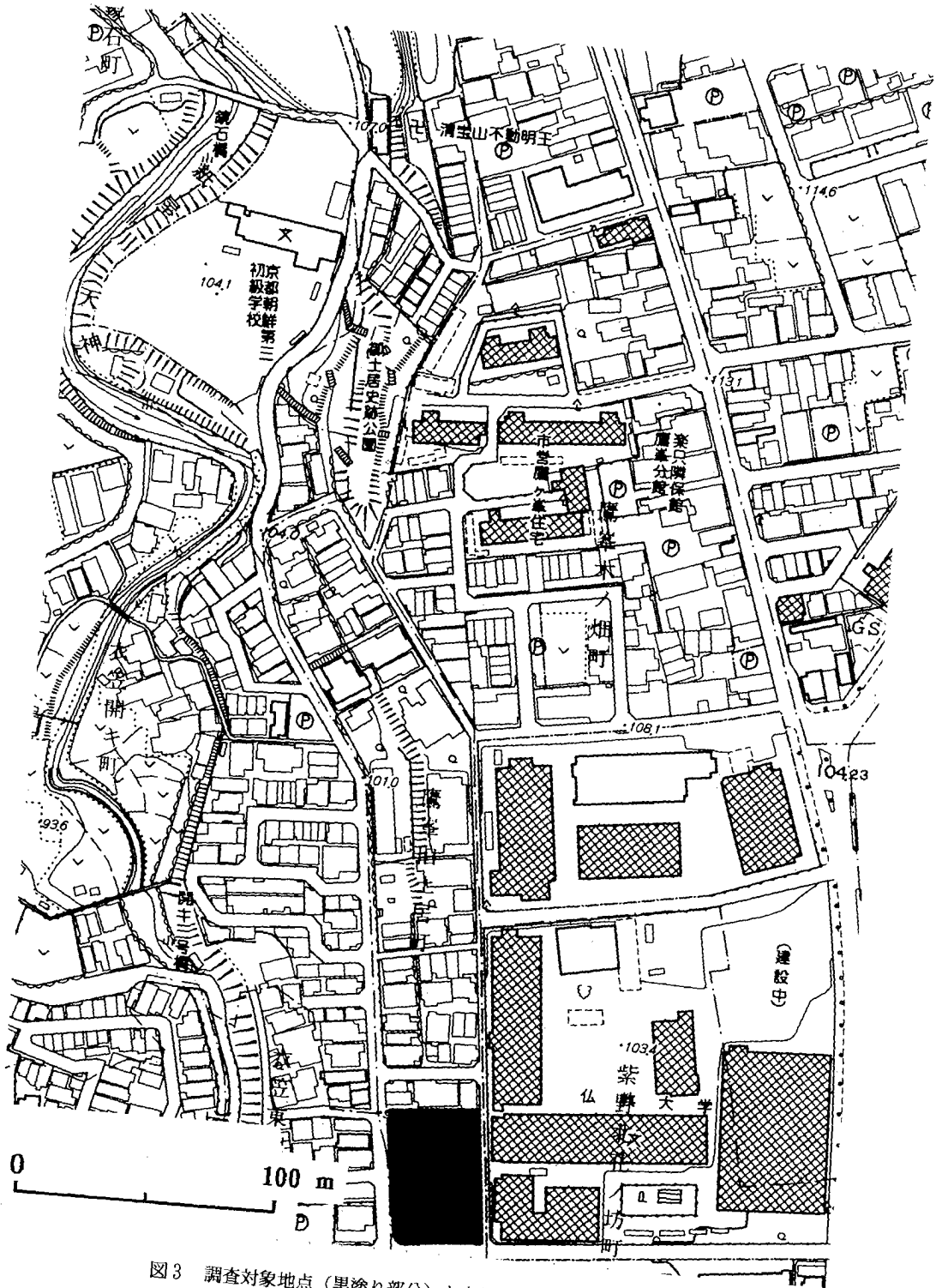


図3 調査対象地点(黒塗り部分)と史跡・御土居付近の現況
(縮尺2500分の1)

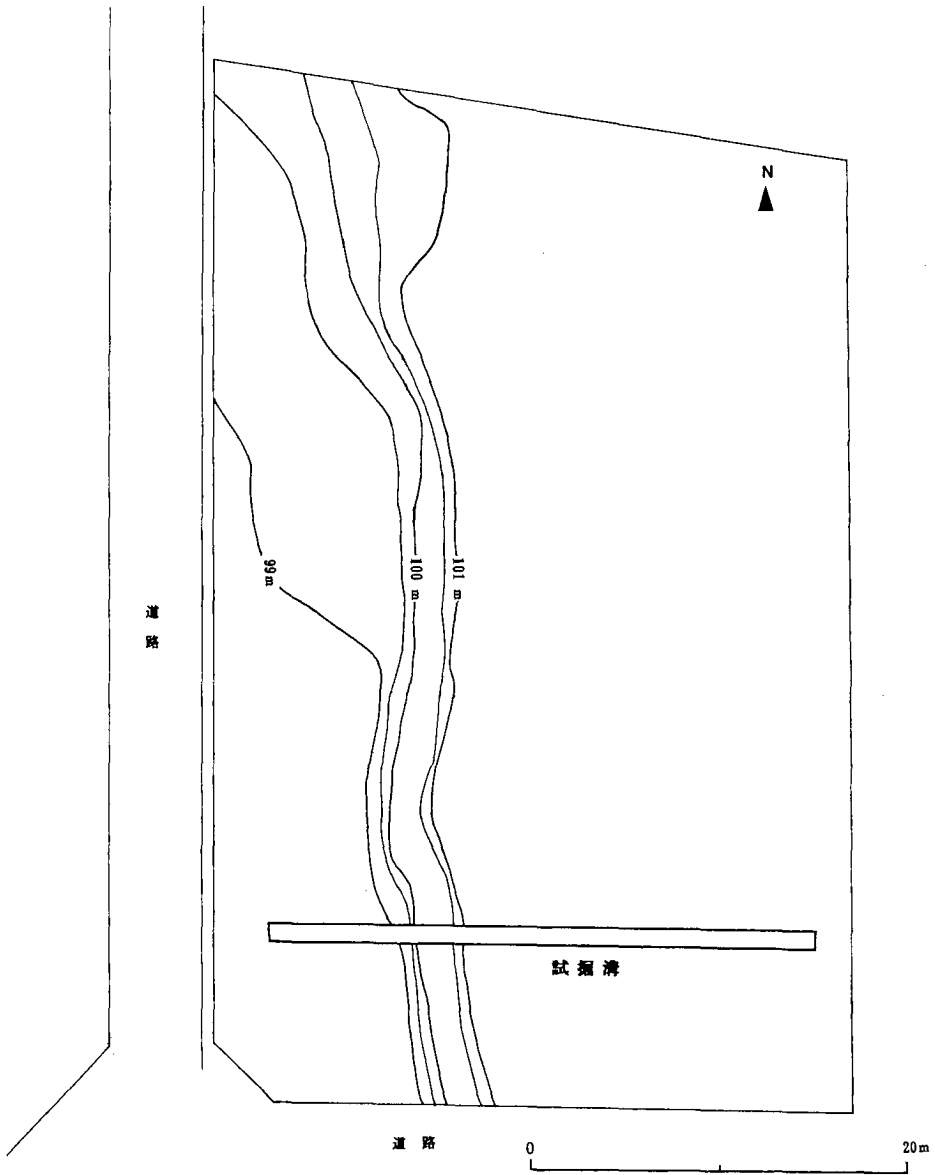


図4 調査地点と試掘溝の位置

はほとんど残存しておらず、御土居築造時のものではなく、後世の盛土によって造成されていることが知られた。よって、この部分では御土居の盛土についての直接の情報は得られることができなかった。これらを除いて、断面観察の結果として御土居の土塁盛土の可能性の考えられるものは、黄褐色ないしは褐色の砂質土（図6の1の⑦）であって、確実に御土居構築当初の盛土と認められる良好な土層は認められなかった。

この地点の試掘溝における観察での一つの成果は御土居が築造された箇所における地山面を

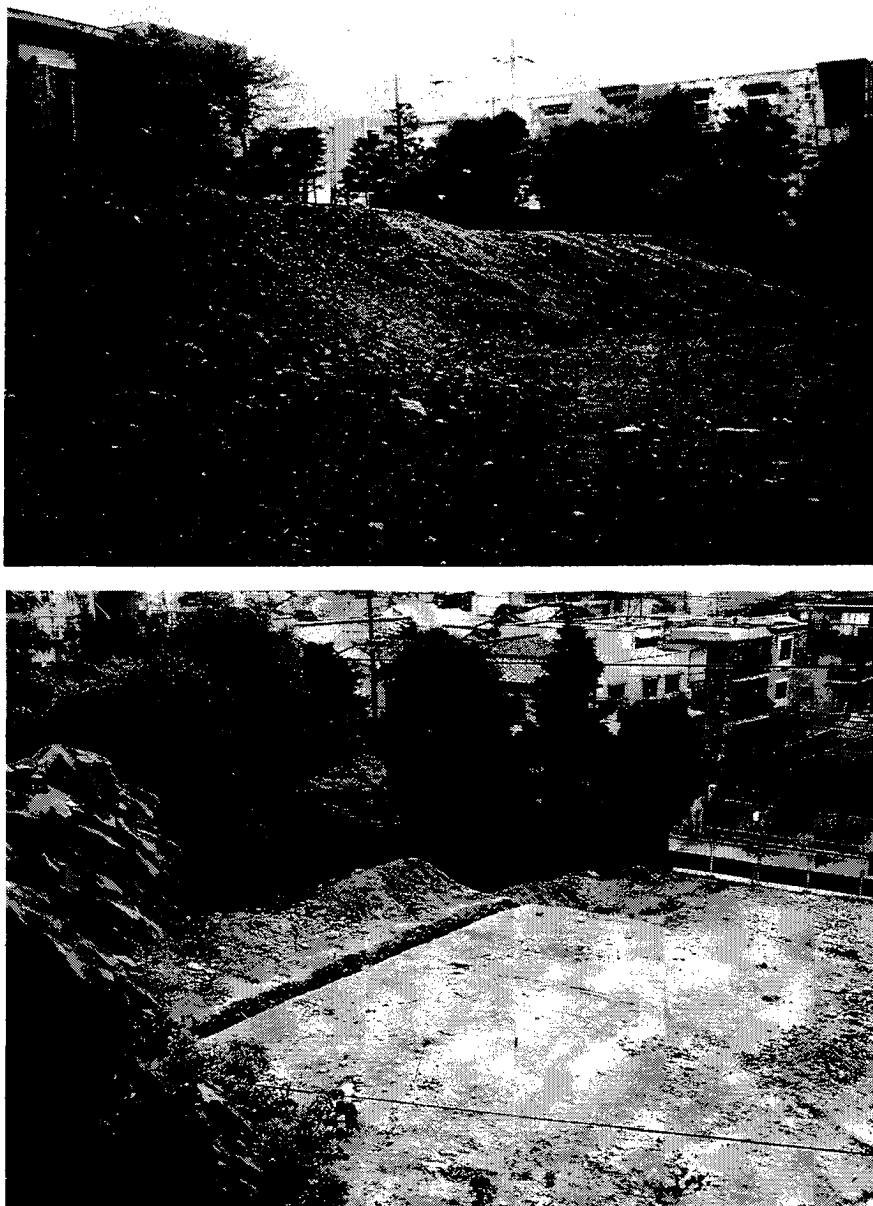
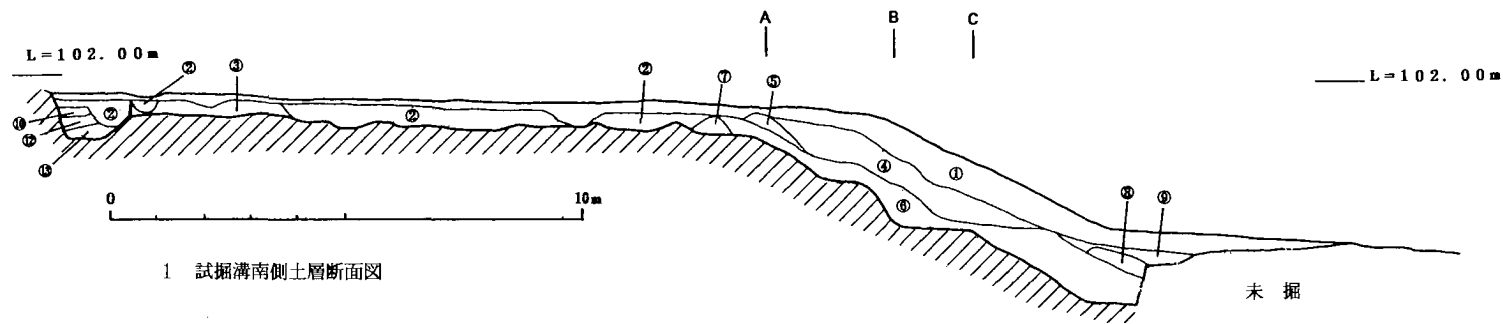


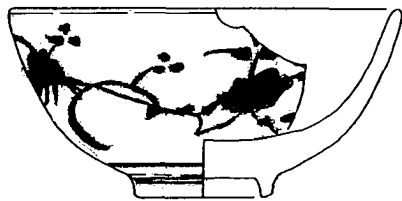
図5 上：調査前の状況（北西から）
下：試掘溝の状況（南東から）

検出したことによって、局所的にはあるが自然地形が知られたことである。この層位は基本的には堅緻な質の黄褐色礫混り砂質土によって形成されており、今回の試掘によっては人為的な遺物は発見されなかった。この層位は植村義博氏の分類によれば、高位段丘礫層の一部を形成するものと考えられる。⁽¹²⁾

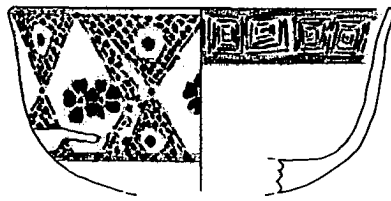


1 試掘溝南側土層断面図

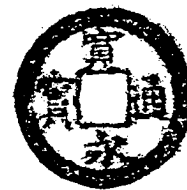
- ①表土 ②攪乱 ③黄褐色～褐色砂質土
- ④黄褐色～褐色礫混 (φ2～7cm) 砂質土 (木炭、木片、瓦片含む)
- ⑤黒褐色礫混 (φ1～5cm) 砂質土 ⑥暗褐色礫混 (φ5～20cm) 砂質土
- ⑦黄褐色～褐色礫混 (φ1～5cm) 砂質土 ⑧橙褐色砂質土 ⑨赤褐色シルト
- ⑩黄褐色砂質土 ⑪暗褐色砂質土 ⑫灰褐色砂質土



2



3



4



図6 1 試掘溝南側断面図 2～4 出土遺物 (⑥層) 4は実大

調査前の現地表は標高101.5～101.7m付近で平坦な面を作り出し、ここが宅地などに利用されていたのであるが、試掘溝で地山と認識した自然地形(図6の1の斜線部分)では標高101～101.3mあたりで平坦面を呈し、それから西側へは水平距離で3mの間に標高差で約2mほど下がる傾斜となっている(図6の1のA-B間)。ここでいったん幅約1.6mの平坦面があって(図6の1のB-C間)、その西側は水平距離で2.5mの間に標高差で1.5m程度の斜面となり、さらに調査箇所⁽¹⁾の西側すなわち紙屋川の河岸へと下っていくことが知られた。すなわち、調査箇所⁽¹⁾の自然地形は途中にわずかな平坦面があることを除くと、標高101～101.3mの平坦面から西側へ傾斜し、その傾斜は水平距離で約7mの間(図6の1のA-C間)に標高差では約4m以上という傾斜をもつ。途中にある小さな平坦面が南北に面的に広がるのかどうか、今回の試掘溝のみから判然としないが、全体の傾斜からみると人為的につくり出されたものである可能性がたかいと推定している。全体として、この部分の元来の地形は西側の紙屋川に向かって、現状よりもかなり急な傾斜地を形成していたのであって、御土居はこのような傾斜変換点に接して通過していたことになる。地形分類的には高位段丘面に相当する鷹ヶ峰台地⁽²⁾が、紙屋川の河谷を形成する低位段丘へと変わる部分にあるとされる。

部分的にはあるが、御土居の自然地形に対する占地の状況が類推されたが、これを東アジアにおける土城の立地構造のなかで比較、分析することによって御土居構築の意味に接近できる点があると考えるので、次にしばらく自然地形に対する土城の占地などの観点を示すことにしたい。

3 土城の立地と土築構造の観点

(1) 地形に対する構築状態

御土居の性格をさらに別の面から検討するために、御土居の自然地形に対する立地構造の検討が必要となる。

ここで近年、東アジアのとくに古代山城の検討に使用される用語をあげて、土塁や城壁の典型的な立地とこれに関わる構造の類例にかえたい。

一つは斜面に対して、低い側のみに土塁や城壁を構築する方法で、高い側は自然地形の傾斜を利用し、わずかな高さの城壁や土塁を築く類型で、これをふつう「内托」と呼ぶ。この場合、傾斜の下部からは一定の高さをもつ土塁や城壁としての機能をもつが、傾斜の上部すなわち城内側ではほとんど高さをもたないことになる。これは自然地形を利用しているため、構築にかかる労力や時間を短縮でき、なおかつ城内側からは土塁や城壁の上部から攻撃ないしは防御できるという戦略技術上の利点があわせて期待されたものである。

もう一つの類型は尾根の稜線上や平地に立地し、城内側、城外側の土塁や城壁ともに立ち上げて構築するもので、一般的にいわれる土塁や城壁の模式的な断面形態をとることになる。こ



図7 夾築（左）と内托（右）の模式図

れを「夾築」と呼ぶ。

「内托」「夾築」とは、朝鮮王朝時代に構築された華城（現在の水原城）の築造経緯や技術を記した『華城城役儀軌』（正祖 25 年〈1801 年〉刊行）に示された用語であって、これは他の地域や時代の土塁や城壁にも使用されており、本稿でも以降、この用語によって記述した。⁽¹⁴⁾ 「内托」「夾築」ともに土塁が立地する自然地形に左右される構築技法ではあるが、これは稜線や尾根のどの部分に築くかによって、いわば築造者側が選択できる場合が多い。たとえば、尾根の稜線上に築けば必ずから夾築の土塁・城壁となるが、稜線よりやや下がった部分に等高線に平行して築けば、これは内托の土塁・城壁ということになる。朝鮮三国時代に強大な勢力を長きにわたって保持した高句麗においては山城が軍事目的のみでなく、「城民」「谷民」と並列して広開土王碑文に表されているような、構成民の掌握や統御のための政治的、社会的な構造物であったが、高句麗の山城では地形を巧みに利用しながら、一つの山城に内托および夾築の技法を駆使して築城されている。⁽¹⁵⁾

ただし、これは軍事的目的を強く意識した土塁や城壁の立地構造であって、河川の増水や洪水などの自然災害を意識した土塁では、このような類型はあてはまらなくなる。河川に対して対抗するための堤防としての土塁は、水面よりもより高い場所に築くのがもっとも効果的であると考えられ、比高において最高点を外すことになる内托の技法は適当を欠くことは自明であろう。

（2）盛土方法の吟味

これまでふれたきたように御土居の考古学的な調査成果は蓄積されてきており、今後、さらにその蓄積がすすめば、築造の体系的な把握につながるものと思われるが、現在の考古学的知見として、御土居の盛土方法は堰板を構築して、その中に土を充填し、これを層状に叩き締めて積み上げていく、いわゆる版築の技術は用いていないことがわかる。端的にいうと、すでにみたように、御土居西南部にあたる中央市場（右京七条一坊）の地点では、あらかじめ土塁基底部の一方に断面三角形を呈する土手状の小盛土を築いて、この上から土を土塁の中央部に落とし込んでいくという盛土法をとっている。（図1）このような方法は天文元年（1532）に築造年代の下限がもとめられる山科本願寺の土塁でも採用されている。⁽¹⁷⁾ 土木学的知識を動員せずとも、この方法が、いわゆる版築に比べて、工事の迅速な完了には適していると考えられよう。

盛土の材料面からみると、従来は御土居の外側にある堀の掘削土を盛り上げたという見方がつよかった。⁽¹⁸⁾しかしながら、とくに紙屋川河岸は礫層であるため盛土には適さず、文献の傍証記載から、御土居の盛土は大部分が他から搬入されたものであるという見方が出されている。⁽¹⁹⁾

すでにふれたような現在までの発掘調査によっても、土質の異なる複数の土や砂などを用いていたことは確認されていない。たとえば、古墳時代においても、二種類あるいはそれ以上の土や砂などを交互に盛土している例は多く知られている。また、古墳以外でも6世紀後半頃に築造されたことが確認されている狭山池の堤も、土ではないが、葉のついた枝と土を互層に積んでいることが判明している。⁽²⁰⁾さらに、神籠石系山城や朝鮮式山城といった古代山城の土塁にも、粘質土と砂質土を交互に積んでいる例が知られている。中世では鎌倉時代のいわゆる元寇に供えて博多湾岸に構築された元寇防塁にも、粘質土と砂質土を交互に積んでいる部分があって、かつて筆者はこれらを土木技術の面から考察したことがあるが、⁽²¹⁾いずれの場合も砂質土は土塁内部に浸透した水分の排出を目的としており、粘質土のみでは土塁内部の排水ができず、盛土そのものの崩壊をまねくという土木工学的な分析があるとおりである。⁽²²⁾狭山池堤の葉のついた植物の層も砂質土と同様の排水効果をもつ可能性が考えられる。

狭山池堤のように水の浸透と水圧を常時受け続けながら、堤体を保持しなければならない構造物は当然ながら、城郭や山城あるいは古墳のように、長期にわたって維持することを目的とされている構築物に対しても、このように異なる土質の盛土を互層に積んでいく方法は基本的な強度を維持するためにはきわめて有効な方法と考えられる。

御土居とほぼ同時代であり、同様な構築方法の山科本願寺の土塁はふつう戦時に際しての機能が想定され、どちらかという盛土の耐久性、なかんずくその基礎をなす基底部の恒久性よりも、戦闘に備えた工期の短縮と防御のために一定の高さをもたせることを強く意識された構築方法と考えられる。

4 土城としての御土居の吟味

ここまでみてきたような一般的な論理によって、御土居をみていくことにするが、ここでは西側に河川の流れる御土居西北部の状況を実際の御土居跡地の地山すなわち自然地形の観察結果をもとにしながら、占地および立地構造と盛土の構造からみた御土居の性格について考察してみたい。

まず、自然地形に対する御土居の占地および立地については、とくに試掘溝の断面観察によってえられた知見からは、北側および南側の現存史跡指定地や残存状態の良好な地点での土塁延長線上にある西北部分においては現状よりも、西側にやや急に傾斜していたことが知られた。

このような地形に対して御土居の土塁がどの部分を通っていたかによって、土城としての地

形に対する立地構造が大きく異なるが、可能性としては以下の二つが想定される。

（１）土塁が地山の傾斜変換線より高位の段丘上に築造されている場合

（２）土塁断面が傾斜変換点をまたぐ形で構築されている場合。

（１）の場合はいわゆる夾築構造となり、（２）の場合では、紙屋川側にむかって傾斜の降りていく西側では盛土は高くなされた、いわゆる内托構造の土塁になる。

いっぽう、御土居の旧状を知るうえで、築造時に近い資料であり、なおかつ縮尺が約 200 分の一という精度であることから、一つの示準ともなる史料としてしばしば用いられるのが京都大学文学部博物館所蔵の『京都惣曲輪御土居絵図』である（以下では『絵図』と略称する）この『絵図』の成立は描かれている内容から、元禄 15 年 11 月以前に成立したことは疑いないものとされており、⁽²⁾ その時点以前の景観を知ることができる。

『絵図』と断面観察地点との詳細な位置関係の比定は『絵図』と近代に入っても土塁の残存状況が未だ良好であり、なおかつ大縮尺図である大正 11 年測量 3000 分の 1 地形図（以下では大正 11 年図とする、計画京都地方委員会作製）との対比によって行うことができる。すなわち、大正 11 年図の「鷹野北町」表示の西南部分には御土居のなかを鍵の手状に横切る切り通し状の道路がみてとれるが、(図 8) この道路は『絵図』巻 4 でも同様な形状で示されている。これと対応するものとしては、『絵図』に「下野道」という書き込みがあり、この道路を基準として付近の微視的な位置比定が可能となる。『絵図』のこの部分には貼紙がされており、のちの改変が示されているが、これは大正 11 年図の道路の形状とそのまま合致する。(図 9) ここから起算すると断面観察地点はこの道路より、約 100 m ほど北側に位置することになる。

『絵図』における御土居の表現は、このあたりでは共通しており、西側は樹木の生えた山が連続している描かれている。これが何を意味するかについては、同じ『絵図』の表現でも平坦地に御土居を描いている部分には、このような描写がみられないことと対比できる。さらに断面観察地をはさんで南北の御土居には同様の山の図が、とくに御土居の西側斜面にのみ描かれていることを勘案すると、この山の図が描かれた側の御土居の法面が紙屋川に向かって下っていく自然の傾斜面を描き表わしているものとみられる。そうであるとすれば、これが土層観察断面図における A-C (図 6 の 1) への傾斜変換点をも示していることになる。さらに、自然地理学的な地形分類から高位段丘面とされる鷹ヶ峰台地が低位段丘である紙屋川の河谷へと変わる部分が、いみじくも『絵図』では緑の山を成す図によって書き分けられていたのではないかと考えられる。

以上のような考定を総合すると、断面観察地点付近は紙屋川の河谷から傾斜が変換する部分にあたる、植村氏のいう高位段丘端部の平坦部に位置しており、立地構造的には夾築と分類される土塁を構築していたものと考えてよからう。

地形に対する土塁の占地からいえば、傾斜変換点をまたぐ内托法よりも夾築法の方が、傾斜の低い西側との比高は大きくなるわけであって、この部分では御土居の城内側すなわち「洛

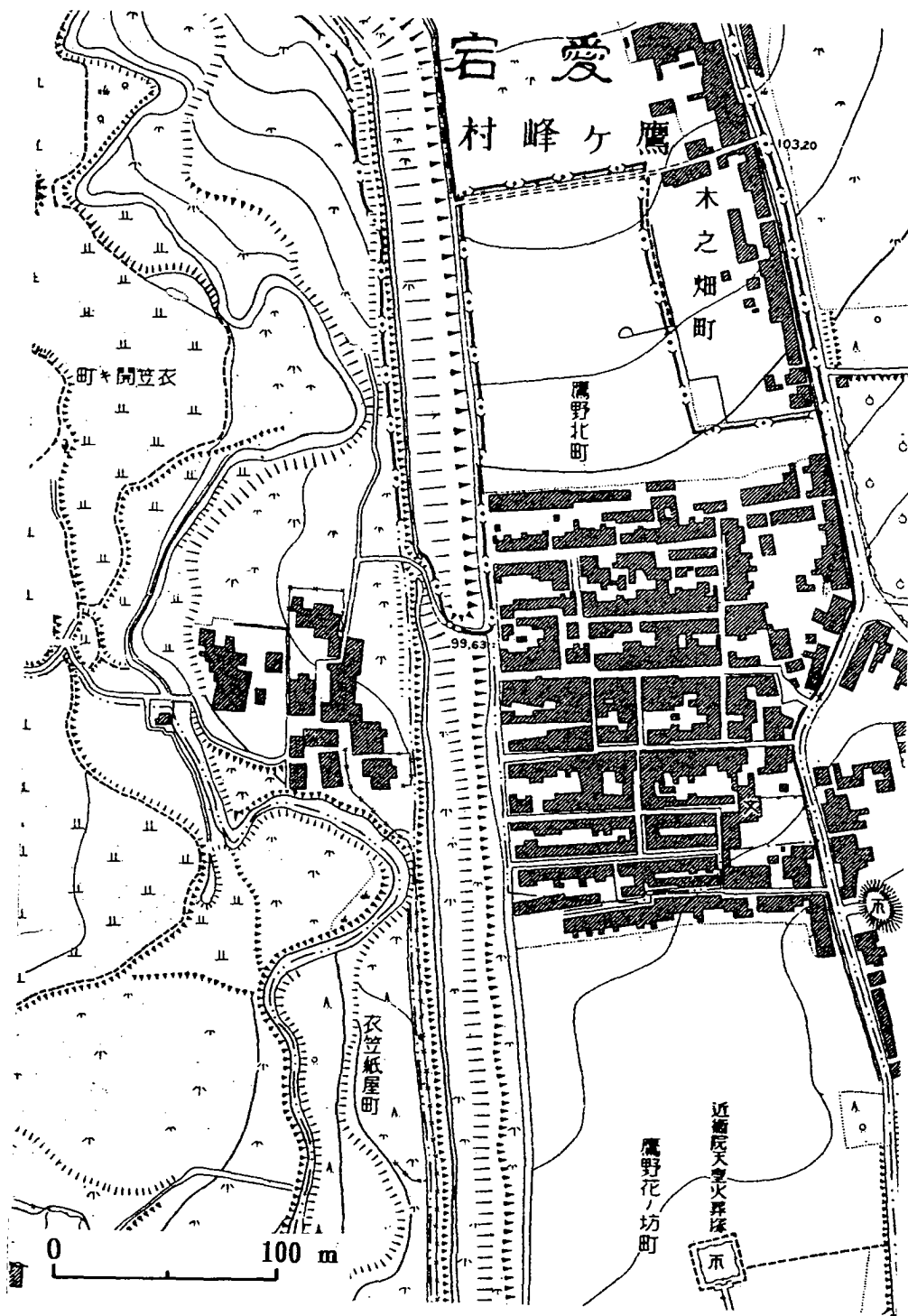


図8 大正11年(1922)3000分の1地形図にみえる御土居を横切る鍵の手状道路

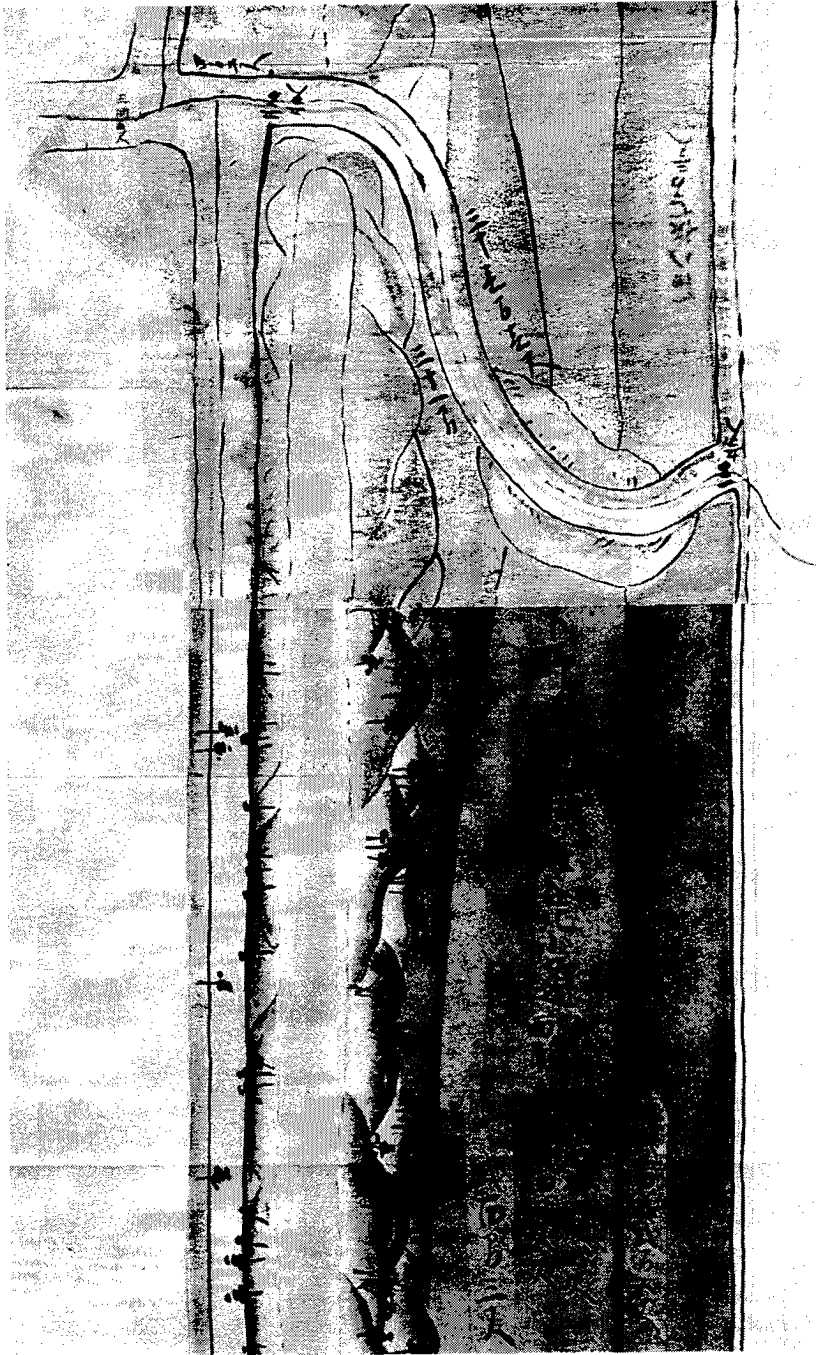


図9 『京都惣曲輪御土居絵図』にみられる御土居を横切る鍵の手状道路

中」側に比べて、城外側すなわち「洛外」側からは相対的に非常に高く見えていたという構築当時の状況が想定できるのである。また、紙屋川沿いのとくに一条以北の部分では、視覚的に

も川を堀のかわりとして使用していたとする点については妥当と考える。⁽²⁴⁾

またいっぽうでは、鴨川に沿う部分で、御土居の防御的性格とならんで、堤防としての性格についてもふれられることがあり、御土居は防御的性格のみならず、洪水に対する堤防としての意味もあったといわれる。⁽²⁵⁾

それとは対称的に、今回、断面観察を行った部分を含めた一条以北の紙屋川沿いの部分に限っていうならば、御土居は河川水面との比高差を考慮しても、洪水を防ぐという役割は、築造の際しての設計思想のなかに盛り込まれていたとは考えにくい。

このように紙屋川の増水や洪水に対しての堤防の役割を考えずともよいならば、かりに傾斜をまたいで盛土する内托法に類する技法が用いられたとしても土塁としての機能には問題はない。しかしながら、あえて最も高位の地点を選んで築造しているのは土塁頂上部と河川水面との比高差を創出することに意味をもったからだと思われる。これによって、視覚的にも西側すなわち「洛外」側からは非常に高く見えるような設計思想で構築されており、内側からよりも、外側すなわち「洛外」からの視覚的な隔絶性を演出する効果を期待したものと考えたい。

長大な土塁である御土居のなかでも、とくに一条以北の紙屋川沿いの部分については、西側から眺める姿は実際の盛土量以上に威信を誇示する景観を期されたものと思われる。

これまで主として断面の観察による御土居の立地構造から得られた考察は、近年の仁木宏氏が強調する点とも整合性をもつように思われる。すなわち、仁木氏は御土居が豊臣秀吉のみが守りうる「一つの京都」を具現するものであって、その内にある旧来の都市共同体の限界性を克服しながら、新たに伸展した都市域をも包括的に組み込むというものであると同時に、巨大な土塁と堀とによって視覚的にも周辺農村と区別するものであるとし、「内に対しては均質性を保障し、外に対しては異質さを強調する」というすぐれた政治的な装置であると指摘している。⁽²⁶⁾ とくに外側からの隔絶性を企図した面を認めるかぎり、段丘端部の傾斜変換点に接して「夾築」法によって構築された御土居は、実際の盛土量よりことさらに巨大に見える土城であって、その姿は人間の視覚を梃子とした政治的構築物と言い得るであろう。

以上、縷々述べてきたように、御土居は立地構造という観点からみる時に、これまでとは異なる面をみせてくれるのである。

ま と め

本稿の主な目的は御土居の西北部分にあたる、南北に現在の史跡御土居が残る中間にあたる「御土居跡地」と認識されている地点の実際の観察を行ったが、現在、御土居そのものである土塁は地表面には全く痕跡を残さず、また断面観察からも、この部分の土層には築造当初の盛土はほとんど残存しないと考えられた。しかしながら、自然地形に対する御土居の占地構造を知ることができ、このことと御土居築造後100年を経っていない頃に描かれた『京都惣曲輪御土

居絵図』との対照検討から、御土居のとくに紙屋川の流路に沿う部分の性格と機能の一端をさぐるためのアプローチを試みてみた。

その結果、観察地点の紙屋川沿いでは御土居は、占地構造的には段丘端部に夾築土塁を築くことによって城内側からの比高よりも、城外側からの比高を有効に創出する目的で築かれたものであって、すぐれて政治的な機能が期待される城壁の占地であることを指摘した。もちろん、その政治的機能のなかには実際の防衛的な戦闘行為に対する有効性も含まれようが、城外側からみた実際以上の高さにそびえる土塁の視覚的な威圧効果を中心となり、これが重要な政治戦略および軍政面での要素であろう。

このような観点から、とくに断面観察地点を含む一条以北の御土居については、西側を流れる紙屋川の河川災害に対する効果は、すくなくとも設計思想の点からは考慮の外にあり、紙屋川を堀にみたと、その内側に築かれた内托構造の土塁は、主として城外すなわち御土居で限られた「落外」側からの威圧的かつ隔絶的な軍政面での大局的思想から設計され、占地されたものと考えたい。

もちろん、南北につらなる御土居は紙屋川沿いの部分だけの個別的な機能や役割から設計されたものではなく、さらに御土居全体としての設計思想のなかでの意味がもっとも重要視されたであろうが、個別の部分には御土居の本来の意味を知る端緒が残されていると考える。

地理学や中世史あるいは近世史の門外にある筆者が、あえてこのような小文をまとめたのは、ひとつには東アジアの古代城郭を検討している視点で、御土居の研究に異なったまなざしをもとめられないかということにあった。もう一つには御土居跡地といわれ、検討の外におかれている地点でも、大々的な発掘調査でなくとも、調査費用の捻出が困難である状況の簡略な断面観察によって、有効な知見をうることはできないかという、一種の弥縫の策ではあるが、とくに御土居跡地といわれる地点を検討する上では現実的対応の一つの選択肢ではないかと自問している。

最後に、御土居やこれを含んだ都市史および中世史・近世史などについては、初学者の域を出ない筆者の誤謬や誤解を含めて、東アジアの城郭研究に資する教示をおおぐことをのぞみながら、小文をとじたい。

注

- (1) 仁木 宏『空間・公・共同体』青木書店 1997年、同・「都市京都と秀吉——首都の平和と公儀——」（『日本史研究』420）1997年
横田冬彦「城郭と権威」『岩波講座日本通史』第11巻 岩波書店 1993年
川嶋将生『中世京都文化の周縁』思文閣出版 1992年 p.10～11, 71～72などの近年の論考とその参考文献を参照。
- (2) 中村武生「京都惣曲輪御土居跡の推定」（『佛敎大学大学院紀要』23）1995年
同・「豊期京都惣構の復元的考察——「土居堀」・虎口・都市民——」（『日本史研究』420）1997

年

「京都大学文学部博物館蔵『京都惣曲輪御土居絵図』の基礎的考察——近世京都における御土居の存在意義をめぐって——」桑原公德編『歴史地理学と地籍図』ナカニシヤ出版 1997年

- (3) 丸川義広「御土居跡の発掘調査とその成果」(『日本史研究』420) 1997年
(4) 平田 泰・吉川義彦・菅田 薫「右京七条一坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和57年度 京都市埋蔵文化財研究所 1984年

これ以外に御土居に関する調査については以下のような報告がある。

丸川義広・木下 保・辻 裕司「平安京右京九条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和62年度 京都市埋蔵文化財研究所 1991年

松井忠春「旧洛南中学校内遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第11冊 1984年

小森俊寛・上村憲章「平安京左京九条三坊」『京都市文化財調査概要』昭和59年度 京都市埋蔵文化財研究所 1987年

小森俊寛「左京九条三坊(一)」『京都市文化財調査概要』昭和58年度 京都市埋蔵文化財研究所 1985年

- (5) 丸川義広「御土居跡の発掘調査とその成果」(前掲)
(6) 山科本願寺発掘調査現地説明会での土壘断面の実見による。
(7) 丸川義広「御土居跡の発掘調査とその成果」(前掲) 上記論文では内側の小盛土と堀の間を「作業空間として確保しておき、堀より遠い側から盛り上げが進行した…」として、工法・工程の復元を試みている。
(8) 中村武生「豊田期京都惣構の復元的考察——「土居堀」・虎口・都市民——」(前掲)では、1934(昭和9)年の室戸台風の際に「海のように」なるほど増水したといひ、また、下立売通り付近では大洪水になったという。
(9) 中村武生「京都惣曲輪御土居跡の推定」(前掲)、京都市編『史料京都の歴史』6 付図 1993年
(10) 川根正教「寛永通宝の基礎的研究Ⅰ」「寛永通宝の基礎的研究Ⅱ」(『出土銭貨』4,5) 1995年, 1996年

久光重平『日本貨幣史概説』国書刊行会 1976年 1996年に復刻 pp.93~94など。

- (11) 佐賀県立九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶磁』1984年
西田宏子・大橋康二監修『古伊万里』別冊太陽64 平凡社 1988年
大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 1989年
「特集・最近の肥前陶磁」(『考古学ジャーナル』410) 1996年など
(12) 植村義博「京都盆地北部、鷹ヶ峰台地の地形特性と活構造」(『佛教大学文学部論集』82) 1998年
なお、上掲論文では本稿で「地山」とした部分の形成時期についても考察されている。
(13) 植村義博「京都盆地北部、鷹ヶ峰台地の地形特性と活構造」(前掲)
(14) 『華城城役儀軌』巻首・図説「中国城制必外内夾築、此由野城之多故也、我東城多附岡麓、因利乘便不費工築、而天作内托不用夾築、其所殊制即地勢之異宜也」
(15) 「内托」「夾築」という語についての端的な説明として以下の文章をあげておく。

「石築城壁にたいする技法としては、わが『華城城役儀軌』の用語例によって、内托と呼んでいる方法と夾築という二つの方法が既に三国時代から採用された事実がしられる。前者の内托工法は外面については垂直にちかい石壁を構築するが城内側は土石を補って、積みあげ補強(積心)しただけで、したがって城壁にそった内部地形が平坦化しても、若干隆起した程度にすぎないものが多い。これにたいし、夾築工法は城壁内外面をすべて等しい高さに達する石壁面で構築したものをいい……(以下、略)」

尹武炳・成周鐸「百濟山城の新類型」(『百濟研究』第八輯) 1977年(韓国文)

土城としての御土居 (門田誠一)

- (16) いちいちの例はあげえないが、自然地形を活用して土塁の形態や構造を選ぶのは高句麗山城の大きな特徴である。
門田誠一「朝鮮半島における古代山城の構成要素——立地と構造の基礎的視座——」古代学研究会 1998 年 4 月例会発表資料
- (17) 山科本願寺発掘調査現地説明会での土塁断面の実見による。
- (18) 石田孝喜「お土居」杉山博ほか編『豊臣秀吉辞典』新人物往来社 1990 年
- (19) 中村武生「豊臣期京都惣構の復元的考察——「土居堀」・虎口・都市民——」(前掲)
御土居の盛土をどこから調達したかについては、はっきりわからないが、上掲論文で中村氏は『北野社家日記』天正 19 年閏 1 月 28 日条に「今日民法大將軍のきはあか土ほりたる所をむめさせよとの事候、西京の物共北野之者共として」とみえ、御土居築造期間にあたることから、御土居に用いた土を掘削したこととむすびつけている。
- (20) 工業善通「古代築堤における「敷葉」工法——日本古代の一土木技術に関する予察——」奈良国立文化財研究所編『文化財論集Ⅱ』同朋舎出版 1995 年
- (21) 門田誠一「東アジアにおける神籠石系山城の位置」(『古代学研究』112) 1986 年
門田誠一「古墳時代における土木技術の系譜と開発の展開——盛土構造の分析的視点」(『文化史学』50) 1994 年
崔孟植「百濟版築工法に関する研究」『碩晤尹容鎮教授停年退任記念論叢』碩晤尹容鎮教授停年退任記念論叢刊行委員会 1996 年(韓国文)
- (22) 山内豊聰・卷内勝彦「元寇防塁構造の土木学的考察」(『九州大学工学集報』45-3) 1972 年
福岡市元寇防塁発掘調査委員会編『福岡市西新元寇防塁発掘調査概報』福岡市教育委員会 1970 年
- (23) 中村武生「京都大学文学部博物館蔵『京都惣構輪御土居絵図』の基礎的考察」(前掲)
- (24) 中村武生「豊臣期京都惣構の復元的考察——「土居堀」・虎口・都市民——」(前掲)
- (25) 木下政雄・横井 清「お土居と寺町」京都市『京都の歴史』4 1969 年、横田冬彦「城郭と権威」(前掲) など
- (26) 仁木宏『空間・公・共同体』(前掲) pp.105～115, 同・「都市京都と秀吉」(前掲)

図・写真出典

図 1 —— 注(3) 丸川論文, 図 6 の 2～4 —— 製図は山中繁君による, 図 8 —— 計画京都地方委員会作製大正 11 年測量 3000 分の 1 地形図, 図 9 —— 京都大学総合博物館所蔵『京都惣構輪御土居絵図』巻 4 より複製, その他使用した地形図, 基本図は国土地理院および京都市都市計画局作製のものによっている。

図 9 は京都大学総合博物館の閲覧および掲載許可をえた。末筆ながら記して謝意を表します。

(もんた せいいち 史学科)

1998 年 10 月 14 日受理